

第3回

教職員のおすすめ本展示



学生図書委員会

【教員】

●杉 岳志先生



『生きて帰ってきた男—ある日本兵の戦争と戦後（岩波新書）』

小熊英二著 岩波書店 2015. 6 発行

副題にある「ある日本兵」とは、著者の父、小熊謙二氏のこと。本書は、著名な歴史社会学者が父親への聞き取りをもとに執筆した書籍です。歴史の本と聞いて尻込みする人もいるかもしれませんが、証言に合わせて時代背景が説明されるので、現代史の知識がなくても心配はいりません。

本書の描く戦争と戦後は、歴史の教科書では知ることのできない庶民の戦争と戦後です。むしろ、小説などに描かれる戦争と戦後に近いかもしれません。しかし、決定的に異なるのは、本書の戦争と戦後は実際の体験に基づく「生きられた二〇世紀の歴史」(p. 379)であるという点です。皆さんの曾祖父母の世代が体験した戦争と戦後はどのようなものだったのか、ぜひ生の声を聞いて（読んで）ほしいと思います。

●藤居 由香先生



『祭りのしつらい 町家とまち並み』

岩間香、西岡陽子編著 京極寛写真 思文閣出版 2008. 2 発行

皆さんは、お祭りと住宅や町並みとは、関係が深いことを、普段あまり意識していないのではないのでしょうか？

町家では、

お祭りのために 「座敷を飾る」

お祭りのために 「棧敷窓を設ける」

お祭りのために 「提灯を点す」

それらの住宅の集合体として町並み景観が形成されています。

p. 133 には「祭りの演出が町並みを特徴づけ、民家・町並みの保存継承のモメントになっている」とあり、祭りが町並みへ果たす役割は大きいものです。

この本には全国各地の事例が取り上げられていて、島根では平田の一式飾りが p. 45, 46, 200, 214 に載っています。私のおすすめは、新潟県村上市：雛祭りの季節の屏風まつりです。

鮮やかな写真が沢山載っているので写真集としても楽しめる本です。

●前林 英貴先生



『ヤンキー母校に生きる』

義家 弘介著 文藝春秋 2003.10 発行

第3次安倍内閣で文部科学副大臣に就任した義家弘介氏をご存じだろうか。もともとヤンキーだった義家氏が、母校である北海道の北星学園余市高等学校で教師として働くドキュメンタリーです。高校中退者や不登校経験者など、様々な問題を抱えた生徒を相手に、彼ならではの熱血な指導を展開していきます。ヤンキー出身の教師がいるということだけでなく、色々な事情がある生徒を受け入れる学校が存在するという点にも注目してほしい。本作品は竹之内豊主演でドラマ化されましたが、この本と併せて、北海道放送制作のドキュメンタリーDVDも是非視聴してほしいと思います。必ず感動します！



『ループ』

鈴木 光司著 角川書店 1998.1 発行

貞子で有名な日本が誇るホラー大作である『リング』シリーズの完結編。『リング』や『らせん』は映画化されましたが、この『ループ』はホラー要素が少ないためか映画化はされていません。しかし『リング』を観た人は、ただひたすら「怖い！」と感じただけで、貞子と呪いのビデオの本当の真実はわかりません。この作品では、『リング』シリーズで起こった様々な出来事のからくりが明かされます。現代では当たり前となっているこのからくりを、発刊時に着目した鈴木氏の才能には脱帽です。『リング』を観たことがあるという人は、是非『リング』シリーズの結末を。

●山下 由紀恵先生



『クシュラの奇跡』

ドロシー・バトラー著 百々祐利子訳 のら社 1984.5 発行

この本の表紙の写真に、絵本を抱いた一人の少女が写っています。重度の複雑な障害を持って生まれたクシュラという名前の少女です。後ろに笑っている若い夫婦がいます。クシュラの両親です。そして表紙裏に著者の女性の笑顔があります。クシュラのおばあちゃんです。異常な染色体パターンをもって生まれ、育たないといわれた子どもを、二十歳そこそこの両親が無我夢中で育てるうちに、発達の可能性が芽生えていく・・・クシュラが言葉を獲得することにより、いわば二度生まれるという精神発達の不思議さ、その不思議を生み出す若い両親のかかわり、登場する絵本の繊細さ、それらがこの本の尽きぬ面白さです。

【職員】

●岩本 幸治（管理課課長）



『とんび』

重松清著 角川書店 2008.10 発行

「とんび」は、中日新聞などで連載されたものです。広島を舞台にした親（父）子の話で、テレビでも二度ドラマ化されました。

主人公である康男が不釣り合いな奥さん美佐子と息子の旭と幸せな生活を送っている最中、最愛に美佐子に先立たれ、様々な困難に直面し、不器用に戸惑い、悩みながらも息子の幸せを第一に考え、周囲の支えを受けながら男手一つで息子を育てた、父の半生と親子の絆を描いた作品です。

描かれている父親像はまさに昭和の親父です。学生の皆さんは、普段父親をどの様に思っているのでしょうか。この小説を読めば、普段あまりしゃべらない父親の気持ちに少しだけ触れることができるかもしれません。

●鴨木 聡子（管理課）



『星野道夫（別冊太陽）』

星野直子監修 平凡社 2016.8 発行

『ぼくたちが毎日を生きている同じ瞬間、もうひとつの時間が、確実に、ゆったりと流れている。日々の暮らしの中で、心の片隅にそのことを意識できるかどうか、それは、天と地の差ほど大きい。（星野道夫・著）』 アラスカの大自然とそこに生きる人たちを愛した、写真家の星野道夫さんが亡くなって今年で20年。妻・直子さんが監修したこの本は、雄大な自然と動物を印象的にとらえた写真や、生き方のヒントにもなり得る豊かな文章など、星野さんの魅力が溢れる一冊です。主な著作も紹介されているので、アラスカの写真集や、読み継がれる静かなベストセラーと話題のエッセー集「旅をする木」なども併せてどうぞ。

●安部 千春（管理課）



『ハルさん（創元推理文庫）』

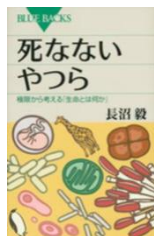
藤野恵美著 東京創元社 2013.3 発行

このお話は頼りないお父さん“ハルさん”と賢くしっかり者の娘“ふうちゃん”の成長が“ちょっと不思議な事件”の思い出を織り交ぜながら描かれています。

物語の中で重要な役割を果たしているのは天国にいるハルさんの奥さん“瑠璃子さん”です。ハルさんが困ったとき瑠璃子さんはそっと話しかけてくれます。

ミステリーとは書かれていますが、読み終わった後に優しい気持ちにさせてくれるほのぼののミステリーです。瑠璃子さんの推理は読んでいてスッキリさせてくれ「なるほどあれとあれがこうつながるのかあ〜」と思わず納得してしまいます。ぜひ読んでみてください。

●成松 加奈子（教務学生課）



『死なないやつら』

—極限から考える「生命とは何か」—

長沼毅著 講談社 2013.12 発行



『宇宙からみた生命史(ちくま新書)』

小林憲正著 筑摩書房 2016.8 発行

日本時間9月9日朝、小惑星探査機「オシリス・レックス」がフロリダ州から打ち上げられました。小惑星「ベンヌ」を目指すこの探査機は「はやぶさ」のように砂や石を採取し 2023 年に地球に持ち帰る計画だそうです。地球の生命の起源には諸説ありますが、宇宙起源も有力な説の一つとなっています。この探査機が持ち帰る微粒子から生命の起源に関する情報がみつかるのかもしれませんが。今回ご紹介する『死なないやつら』は、そういった生命の起源の話や、「死ぬ」技術を身に着けた生物の話、進化している「進化論」の話などわかりやすく面白くまとめられています。また『宇宙からみた生命史』ではより詳細に丁寧に解説されています。

●中島 英樹（教務学生課）



『流星ワゴン（講談社文庫）』

重松清著 講談社 2005. 2 発行

家族に向き合うことについて、不器用な「父」目線で書いている小説です。リストラ、妻の秘密、子どものいじめ、そして家庭崩壊…、などの辛い現実を前に、一度は人生を諦めかけた主人公が、不思議なワゴンに乗せられて、その時は気付かなかった“予兆”と“岐路”に立ち戻ります。そこでもまた失敗を繰り返しますが、何度も立ち向かっていく中で少しずつ大切なものに気づいていく主人公に、知らず知らずの間に（特に男性は）自身を重ねて読んでしまうのではないのでしょうか。

ドラマ化（2015年）されたのですが、キャストिंगが絶妙なのでそちらも観てみてください。

●小倉 佳代子（地域連携課）



『植物は<知性>をもっている—20の感覚で思考する生命システム』

ステファノ・マンクーゾ、アレッサンドラ・ヴィオラ著

NHK 出版 2015. 11 発行

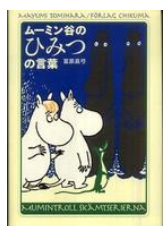
「植物は、動けないし考えもしないから動物のほうが人間に近い。人間が植物を利用している。」という考えがひっくりかえされ、花や草木や野菜たちとこれまで通りの付き合いが出来なくなってしまうかもしれない本です。

植物には「感覚」（人間の五感より多い20も！）が備わっており、植物同士だけではなく、昆虫や動物ともコミュニケーションを取りながら生きているのだそう。

トマトは虫に襲われると、化学物質を出して周りの仲間に危険を知らせます。マメ科の植物とその根に住んでいる細菌は、お互い必要な栄養分を交換するギブアンドテイクの関係。動物の「脳」ではなく「インターネット」のように体全体に機能を分散させているので、食べられたりちぎられたりしても逃げなくて大丈夫…。

人間と違うのは動けないことだけ。「植物」は人間とは別の「知性」や「感覚」を持った生き物である、ということが、SFではなく、科学者の研究を元に書かれています。

●藤本 菜穂（地域連携課）



『ムーミン谷のひみつの言葉』

富原真弓著 筑摩書房 2009. 4 発行

コミックス版のムーミンは夢見がちで、スノークの女の子は駆け引き上手。スニフはドライで打算的な性格。

この本は、児童文学の「ムーミン」とはひと味違った魅力を楽しめる一冊になっています。トーベ・ヤンソン氏のユニークな言い回しや、表情豊かに描かれるキャラクター達。

小さなコマに凝縮されたムーミンの世界をご堪能ください。



『墜落遺体—御巢鷹山の日航機123便（講談社+α文庫）』

飯塚訓著 講談社 2001.4 発行

1985年8月12日。群馬県の御巢鷹山の尾根に、日本航空機123便が墜落。著者の飯塚訓氏は遺体確認捜査の責任者として、最前線で遺体の身元確認にあたりました。

不眠不休で検屍、身元確認作業を続ける医師、看護師、警察官。一瞬にして肉親を失った遺族の悲しみと怒りが充満する体育館。著者の体験と関係者の証言をもとに、全遺体の身元確認にいたるまでの闘いが切々と語られています。

初めてこの本を読んだ時の衝撃は忘れられません。辛く、胸が締めつけられるような内容ですが、生と死に対する価値観が変わった本です。

●岡本 怜嗣（新学部設置等準備室）



『漢文と東アジア—訓読の文化圏（岩波新書）』

金文宮著 岩波書店 2010.8 発行

現在世界共通語は英語ですが、前近代の東アジア共通語は漢語（漢文）でした。

本書は共通語だった漢文を読む手段としての訓読法（レ点等）の東アジア地域での発達について書かれています。日本における訓読法の発展には、中国に留学経験のある禅僧達が影響を与えたことや、日本以外でも訓読法が行われていたことは自分にとって新発見でした。



『水墨画にあそぶ—禅僧たちの風雅』

高橋範子著 吉川弘文館 2005.9 発行

室町時代には多くの水墨画が制作され、東アジア共通語の漢文・漢詩を作ることができた禅僧達はその間に賛を書きました。本書ではそれら画賛から当時の文雅の世界を再現することを主題にしています。室町時代の人々の生き生きとしたつながり、ネットワークを美術作品から窺い知ることができて興味深いです。